

教員自己評価申告書

氏名：高野雅夫

(1) 平成 19 年度の教育活動について、以下の項目を中心にして特に貢献のあった事柄について記述してください(500 字以内)。

- ①授業担当
- ②教育改善（授業工夫、教材作成、教授法開発）
- ③研究指導（修士論文、博士論文）
- ④学生支援（能力開発、就職支援）

【教育活動】

- ①体系理解科目講義「資源・エネルギーの環境学」、体系理解科目演習「持続可能な地域づくり実践セミナー」
- ②講義「資源・エネルギーの環境学」においては、文系・工学系の出身者でも十分に理解が可能で、かつ持続可能性／不可能性という概念を原理的なところから理解できるように努めた。演習「持続可能な地域づくり実践セミナー」は将来公務員志望の学生を中心に、受講学生どおしのコミュニケーションや、実際に地域づくりに取り組んでいる NPO 法人への訪問調査をとおして 実践的なスキルを身につける内容とした。学生による授業評価では体系理解科目の中でトップクラスの高い評価を得た。
- ③「らせん水車によるピコ水力発電システムの開発」、および「葉面微生物生態系における窒素固定細菌の探索」というテーマで修士論文作成を指導した。特にらせん水車による発電システムの開発は岐阜県揖斐川長坂内での実証試験を行い、その実用性を検証することができた。
- ④らせん水車の研究を行った学生は、この研究の共同研究者である機械メーカーに就職し、引き続きらせん水車の研究開発を行っている。

(2) 平成 19 年度の研究活動について、以下の項目を中心にして特に貢献のあった事柄について記述してください(500 字以内)。

- ①研究業績
- ②研究業績への受賞
- ③学会の招待講演、基調講演等
- ④外部資金獲得状況

【研究活動】

- ①縞状堆積物から過去の環境変動のリズムとイベントを解読する研究について、以下の論文を公表した。
Katsuta, N., M. Takano, S. Kawakami, S. Togami, H. Fukusawa, M. Kumazawa, and Y. Yasuda (2007), Advanced micro-XRF method to separate sedimentary rhythms and event layers in sediments: its application to lacustrine sediment from Lake Suigetsu, Japan, Journal of Paleolimnology, 37, 259-271.

Katsuta, N., B. Tojo, M. Takano, Y. Yoshioka, S. Kawakami, T. Ohno, and M. Kumazawa (2007), Nondestructive method to detect cycle of lamination in sedimentary rocks: rhythmite sequence in Neoproterozoic cap carbonate. In: Vickers-Rich, P., Fedonkin, M., Gehling, J., Bierlein, F. (Eds.), The Rise and Fall of the Vendian (Ediacaran) Biota, Geological Society of London Special Publication, 286, 27-34 .

Tojo, B., N. Katsuta, M. Takano, S. Kawakami, and T. Ohno (2007), Calcite-dolomite cycles in the Neoproterozoic cap carbonate, Otavi Group, Namibia. In: Vickers-Rich, P., Fedonkin, M., Gehling, J., Bierlein, F. (Eds.), The Rise and Fall of the Vendian (Ediacaran) Biota, Geological Society of London Special Publication, 286, 103-113.

勝田長貴・高野雅夫 (2007): 太陽活動の変化に対する地球の気候システム応答－湖底堆積物の分析から, 科学, 77(10).

(3) 平成 19 年度の社会貢献について、以下の項目を中心にして特に貢献のあった事柄について記述してください(300 字以内)。

- ①国、地方自治体、民間団体等の各種委員会委員、審査委員、など
- ②学会活動（学会役員、編集委員、など）
- ③国際交流（学術交流協定締結、など）
- ④社会教育活動（公開講座、など）

【社会貢献】

- ①豊田市環境審議会委員（地球温暖化防止対策部会長）、瀬戸市環境審議会委員、長久手町平成こども塾運営委員
- ③中部 ESD 拠点運営委員会準備会座長として、中部 ESD 拠点（Chubu ESD-RCE）の国連大学による認定に中心的な役割を果たした。
- ④以下の各種講座の講師を務めた。
放送大学愛知学習センター対面授業「地球科学」講師
環境省主催「日中韓環境政策担当者合同研修会」講師
（財）地域活性化センター主催「全国地域リーダー養成塾」講師
東海農政局岐阜事務所主催「岐阜農林水産情報交流モニター交流会」講師
名古屋市主催「都市農業振興協議会園芸部会研修会」講師
なごや環境大学「地域デザインスクール」講師
なごや環境大学「藤前干潟講座」講師
なごや環境大学「原子力講座」講師
なごや環境大学「2050 年担い手塾」講師
なごや環境大学「ESD 講座」講師
瀬戸市主催「せと環境塾プレ講座」講師
安城市主催生涯学習講座「五感で学ぶ食と農」講師
安城市主催「環境アドバイザー養成講座」講師

東海高校「キャリアデザイン講座」講師

NPO 法人森と水辺の技術研究会主催「岐阜環境 NPO インターンシップ事業」講師

(4) 平成 19 年度の管理運営について、以下の項目を中心にして特に貢献のあった事柄について記述してください(300 字以内)。

①大学運営に関わる役職

②全学委員会の委員長及び委員

③部局内委員会の委員長及び委員

④各種の支援活動

【管理運営】

②名古屋大学 ESD ワーキンググループ委員として、中部大学総長および名古屋大学総長が共同代表を務める中部 ESD 拠点立ち上げに貢献した。

③環境学研究科放射線障害予防小委員会委員長、将来計画委員

(5) 平成 19 年度の教員活動についての総合評価を記述してください。その際に、環境学研究科のミッションに関連して、どのような貢献ができたのか、次年度に改善すべき課題はなにかについて記述してください(500 字以内)。

【総合評価】

1. 研究面では持続可能な伊勢湾流域圏を構築するための課題抽出と課題解決手法の提案をめざして、「持続可能な山間地域のデザイン」研究をすすめた。特に長野県根羽村をモデルに将来の人口、森林資源構成、エネルギー需給のデザインによって、持続可能な村の姿を描くことができた。根羽村村長をはじめ村職員にプレゼンをして成果を報告したところ、具体的な村の将来像が明らかになったと意義を認めていただいた。またマイクロ水力発電システム、地中熱利用住宅、有機廃棄物を用いた有機肥料の養液栽培など、持続可能技術の開発研究をすすめた。いずれも基礎的研究の段階を終え、実用性を検証する実証試験を行う段階に達している。

2. これらの研究を進めるなかで、高度環境実務者というべき、社会の中で活躍する人材の育成を行った。修士過程での研究テーマがほとんどそのまま就職先での仕事につながる例がうまれた。

3. 愛知県豊根村、長野県根羽村、岐阜県旧加子母村（現中津川市）などで地域の課題解決のために行政や NPO、住民と対話を続けた。豊根村、根羽村では村長と個別の対話を行い、総合的な地域づくり政策について意見交換を行った。また豊田市環境審議会地球温暖化対策部会長として、「豊田市地球温暖化防止行動計画」策定に貢献した。また NPO と共同して中高生を対象に将来の地域リーダーを養成する「2050 年担い手塾」など、ESD（持続可能な開発

のための教育)を現場で実践する取り組みをすすめた。

(6) 今回の教員個人評価の試行について、各自の意見を自由に記述してください。

【今回の試行についての意見】

国の財政が破綻状態にある中で、国からの財政支出によって教育研究をすすめる者として、説明責任の一端を果たす大切な自己評価と考える。この自己評価申告書は私個人のホームページで公表したい。

参考資料

環境学研究科の中期目標・中期計画のミッション

1. 環境に関する領域型教育・研究の先端化と文理連携型教育・研究の推進によって、新しい環境学の創造を展望しつつ、その国際的教育研究拠点となることを目指す。
2. 国内外で指導的な役割を果たすことができる、環境の視点を持った良識ある人材の育成を推進する。
3. グローバル・ローカルなレベルで、地域社会の安全・安心の視点からの諸問題の解決と地域社会の持続的な発展の可能性の探求に、連携、協力する。